

似て非なるものなり、わが教育界は、菊の花そのものを樂みとせる菊作りの如く、教育そのものを樂みとする教育者の手に育てられんことを望むものなり、わはれ風流なる菊作りは誰れ、神聖なる教育者は今幾人かある。

予の好める娯樂

(佐々木信綱)

よく勉めよく遊ぶといふ事は、最も望まじき事で、よい娯樂を求めてゐるが、最も好むといふ娯樂が無い、幼ない時母が謡曲を習ふので一所に習つたが、どうも性に合はぬので止めた、父が晩年老いのすまびに碁を打つたのを側で見おぼえて、碁の趣味を知つたが、専門の用に頭を悩ました後、また頭を悩ますのはと滅多に打つた事は無い、始終机に向つてゐるのであるから、戸外の運動をと思ふて、大弓は師に就き、テニスも弟子の人の家にグラウンドがあつたので暫く習ふたが、遂に中絶した、それに家の庭が狭いので、家でする事が出来ぬからであつた。若し娯樂といひ得べくんは、余が娯樂ば讀書と旅行とである、晝の間は自他の用に煩はされるが、物しめやかな夜、または朝疾く會心の書を讀む樂しさはまこと言はむ方なき樂しさである、春と秋によく旅行かする、夏は色彩の變化に乏しく暑くもあるので、春の末蔭が青く菜の花黄なる頃天長節の前夜、野も山も黄に紅に染め出づる頃が、最も旅行にふきはしいから、春秋に旅をする、讀書と旅行はいづれもわが専門の業に關して、益が多いのみならず、娯樂としてもよい娯樂であると思ふ、(新婦人)

紀念の牛塚

川口孫治郎



此由來を語るには、先づ牛の性格を略述する方が便利である。牛の性格を略述するには馬のそれと對照する方法によるがよく分つて且つ覺え易い。世に牛飲馬食といふ諺があるが、食べ方には牛馬共に作法の立つて居ないことは勿論だが、併し馬は必ずしも然ら大食をしない。彼の甘藷に棒を差したやうにイヤに肥つた馬や、臙元豆に針金を突張つたやうにイヤに瘡せられた馬などが暴食をするのは皆腸胃を傷めてから後のことであつて此等は例外である。之に反して牛は生來腸胃が丈夫に且つ大きく出来て居るから、盛に食ひ大に飲む。味よいものなら胃腸が破裂しても尙は食ふ。少し品格が上等でない。

馬は元氣のよい時には常住起つて居る、大層氣分のわるい時の外臥して居るのが一寸見付からぬ。牛は之に反して氣分のよい時は必ず寝る、腹加減よく食事でもしたら早速横になつて居る。病氣の時は更に脚を投げ出す。頗る無作法である。尤も生理上の常患などの時には起つて落付かないこともある。

水に入つては、馬は爪の脱するまで泳いで居るが、牛は尾の抜けるまで泳ぐ。そして其泳ぎ方が馬より下手である。

陸上を歩ませば、「駒の朝駈け」とやら馬の最初は元氣で後に弱りの來るのに對し、所謂「牛歩遅々」として終日行進を續けてよく千里の遠きに達する牛の根氣が聊か牛の名譽を回復するに足る。

のみならず「商賣は牛の涎」といふ諺があつて、短氣は損氣、ネチ／＼やるに限るといふ話である。

素人目には、涎を流して居る者にあまり氣の利いたものがなく、逆も文明開化とやらの近頃に金儲けも出來さうにないやうに映ずるけれど、元來涎をくるものは大概健康なもので其ネチ／＼した、

あまり氣の利かないやうなところに收利があるさうで、何時も帳尻では純益金が多いさうな。そんな點から牛は更に名譽を恢復しさうである。

火珠に燭に遇つては、馬も牛も共に九きり意氣地がな、彼の消防機關を曳く馬や、隊長をのせた砲車を曳いたりする馬などは特殊の訓練を経て居るから平氣で火燭の前にも行動するけれども、普通の馬や牛即ち彼等の天性をわりのまゝにのこして居る馬牛は共に九きり腰が起たぬ。彼等の飼養場若くは其附近が猛火に包まれた時には曳いても突いても決して逃ぐることを得しない、自から焼死しても動かない、此際は人の親切も彼等には徹しない、彼等は火の恐ろしさに目眩みて頭の中には火燭の恐ろしさ以外に何の働もなくなつて終つて居るのである。蛇に魅れられたる蛙と同様に自ら好んで焼死をするのである。夫故に彼等を飼養せる人々は其飼養を掌らしめたる者共に對して、萬一の場合には彼等牛や馬が火燭に深く注意しない中に逸早く外套か袴のやうなもので彼等の面部を全く裏んで然る後に其舍から引出して避難

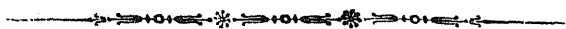
せしむるや、注意を與へておく必要がある。つまらないことのやうだが、萬が一の心得になる。此火船に對する牛と馬との態度は同等で資格に於ては互角である。必ずしも牛は今までの通算で馬に負

けては居ない。訓練した狩獵用の馬や軍馬などは別として、普通の馬は不意に前途の人に立塞がられては覺えず一寸立停るのが其特性であることは既に前に述べておいたが、牛に至つては袴の間でも袖の下でも處かまはず潜つて狂つて逃ぐる。ドウも其態度に品がない。思ひ切つて突き僵して進むのならば暴の中にも取得があるが潜つたり抜けたり丸でなつて居ない。田舎の小兒の御伽話に、馬が人の足を踏んだならば其後七日の間後悔して煩悶する。牛は之に反して殊更に人の足のところへ己の足をもつて行つてギョツと振ぢて踏み付けて夫から後七日間は氣がせい／＼するといふて居るさうだ。若し

馬が後脚で跳ぬる時には双方ともに後方に伸びて

思ひ切つて居るが、牛の跳ねかたが穢い、片脚で後斜に外方に蹴るのである、所謂彈くのである。拙いのみならず見苦しい。馬が嚙む代に、牛が上顎の前方には歯がないので噛めない爲に自然の神より貰つた双の角を振り廻はす、その方が不器用でトント要所に當らないで無茶苦茶にコツキ廻

はすのである。馬の奮闘の態度は眞項より派手に嵩にかへつて打つて出るが、牛の奮闘の形式は下手から歪みくねつて擔ぎ上げて振り落さうとするにある。それで馬に對しては前既に述べた通りグツと彼の頭を押へて俯かしむるに限るが之と全く反對に牛を制壓するには其面繋の端なる鼻木を以て思ひ切つて高く仰向けにさし上ぐるに限る、仰がされては牛は全く無戰闘力である。見給へ遠くに輸送する貨車積みの牛どもの鼻高く縛められて居るのを。之も全く瀛車進行中彼等幾十匹が同盟して貨車中で一揆を起して其暴力を振はれては大變であるからである。されば彼等馬なり牛なりが御隨意にあればてもよし、人間には相應の制馭法は幾らでもある



が、唯彼等の戦闘形式を比較するとドウも牛の方
 が危険で而かもシミツタれて居るやうに思へる。
 長閑な牧場に逍遙して居る洋牛のそれには決して
 左様にも思はないが日本産の牡牛の強大なるもの
 に至つては誠に悽愴の氣が四邊に瀰漫して居るや
 うな感がある、其仁王の用ふる楔の如き二尺にあ
 まる頑壘なる双角は一入の殺氣を添えて居る。牛
 を扱ふを常職とせる者は馬を扱ふ者より人としての
 格が一段低いのが日本で従來の實際であつた
 が、その格低く所謂癡猛派のもの共でも時々は此
 牡牛に一氣に突き平げらるゝことがあつたので
 ある。而かも一度人間に對して勝利を得し經驗
 をなすや彼癡猛性は益増長して少しく意に協は
 ざるや直に角を揮つて此癖を出すのである。従つ
 て之に對して人より虐待が加はるゝ、加はるにつれ
 て益々ねぢくる、ねぢくるが故に虐待するといふ
 のが従來の習であつたのである。
 往年葛城山脈を南より越えて泉州の牛瀧に降つた
 ことがあつた。牛瀧といふ名と少しも關係のあるわ
 けではないが兎に角、巔より牛瀧神社に降る途中

に駄牛の大きなのが山路の双方に彼方此方と横臥
 して居る。彼等は其馭者共が新の荷造りの出來上
 るまで待たしめられて休息して居るのであつた。
 其中少々離れて、丈夫な綱の端を嚴重に松の樹に
 縛りつけられた一匹の拔群の大きなのが頗る癡猛
 な相貌をして而かも疑乎として起つて居つた。其
 キラリと我一行を睨むだ面魂には、我輩にも一見
 之は雷の代物ではあるまいと讀めたのであつた。
 其處へ一人の馭者が慌てゝやつて来て、「通るなら
 早く通つて下さい、牛の前に立止まつては復た間
 違があつてはならぬから」と我一行に懇請する。
 之は面白と思つたが君子危に近ならずで我一行
 も早速、歩を轉じて降りかけた。彼馭者も安心の
 態で其荷造場に返るべく我等の後をついて來たの
 で我輩は一行より稍後れて彼と歩を共にして不圖
 氣についたのは前刻來彼の手にして放さざりし二
 尺ばかりの紅紙で巻いた火箸狀の棒であつた。そ
 こで我輩は前刻彼のいつた「復た間違が」の一語
 を話の糸口として次で其紅紙卷の棒の用向につい
 て尋ねてみたところ、彼の答によつて一度は少々

グツともしたが、終にはホノ／＼と可笑しくもあつた。一伍一什は下の如くであつた。彼馭者の言に據れば、前刻怪しいと認めた彼牡牛は之まで幾多の重罪犯をやつたものであるさうで通例の牛なら夙くに怒と懇親の運命に入つたに相違ないのだが、持つて生れた蠻力、負ふにも曳くにも通常の牛の三倍の重荷に屈托せぬといふ一癖ある爲に、今もあゝして薪負ひに重寶がられて使役せられて居るのだが、前刻のやうに見知らずの一行が今少しグズ／＼しやうものなら其中の誰か一行が今少しグズ／＼しやうものなら其中の誰か

でであつた。持つた紅棒の由來については更に異様の感じをさせられた。といふは彼羸牛の前々の馭者に對して重罪犯をやつた時、勢に乗じて暴れ廻はつて山の瀧の石工の仕事場まで突貫したが、之は、石工が臨時装置の轡の口の松炭の焰をたて、活つて居る中から、右手に握れる尖端の何時しか紅くなつた鉄火箸もて、灼熱せられて真紅になつた仕事用の

石切鑿を挿んで、之を鐵床の上に引上げ、今や將に左手なる鐵槌を揚げて燒刃の上に打たんとせる其一瞬であつた。誠に絶体絶命逃げも隠れも退き引きならぬ苦しさに我知らず石工の左手から鐵槌が横に飛んで右手の燒火箸が眞直ぐに前に突出でた。其灼熱せられた尖端が目を瞶らし怒濤の狼へる如く一突きに石工を屠らんとしてウンと突きかけて来た彼猛牛の鼻の先に御生憎にもチリ、チユいと張合ひよく燒付けといふことになつたので、流石の猛牛も甚だ狼狽して態度を崩つて退却した。攻撃せられた刹那に夢中であつた石工さんも敵が退却したので多少餘裕が出来たと見えて早速の機轉を利かし例の燒火箸を手にせるまゝ、今度は逃げ行く牛を追ひ廻はし根強く追ひ詰め勢込んで燒火箸もて威赫すると、彼猛牛も到頭陥落して此石工の燒火箸の前に從順に降服してしまつた。爾來彼猛牛の馭者は始終燒火箸を用意して萬一彼が狂ひ始めれば早速火箸を示して鎮撫して居つたさうだが、灼熱せる鐵火箸を年が年中持つて歩くといふことは口でこそ容易のやうだが實際では中々

六ヶ敷、随分困つて居つたさうだつたが、必要は
 新工夫を生み、生れ来た専賣特許の焼火箸とい
 ふのが前に所謂二尺許の棒に紅紙を巻いた焼火箸
 と稱するものであつたのである。此紅紙の棒が真
 の焼火箸の代用として矢張り彼猛牛に恐れられ
 て、全く眞の焼火箸と同様に役立つて、今日現に
 用ひて彼猛牛を役して居るのであるといふ話
 の始めはいやに凄かつた割に終の一句が何んだ
 か少しホンノリと可笑しかつたと思つたのは、以
 上の通りであつたのである。
 右の一條は歸校の後、市の新聞紙上に披露をして
 いたが其後年餘にして彼牛追が或日其紅棒を携
 帶することを忘れて爲に到頭亦出の途中でやら
 れたとの事、並に彼猛牛も結局其落付くべき運命
 に片付いたといふことを記者から報知せられたこ
 とがあつた牛君何うしても犖犖と見ゆる。



●青年に教ふる記憶術十則

糸左近

- (1) 新らしき事實に接する毎に既に熟知せる舊き事物との關係を明にせよ。
- (2) 事物を觀察攻究する毎に心を之に專にし、餘念あるべからず。
- (3) 精神を爽快にし興味を感するやうに工夫せよ。
- (4) 記憶を過勞せしめてはならぬ。一時に多く覚えんとするは、恰かも一時に身體を肥さんとして暴食するが如し。
- (5) 覚え難き事でも反覆すれば覚え易き事よりも忘れぬものだ。己の記憶を疑ふな。即ち覺えて居れやうかと己の記憶を疑ひ過ぎるは却つて忘るゝ種である。
- (7) 用なき事を忘るゝやうにせぬと大切な事を忘るゝものだ。(6)セカクして勉強すると腦力が傷み、大いに記憶を悪くする。
- (9) 人が十事を覚ゆる間に、我は五事しか覚えななくても落膽するな、我の五事は終身腦裡に残り、彼れの十事は數月の間しか腦中にないかも知れぬ。(1)彼は速く覺えて長く忘れず、我は遅く覺えて早く忘るゝとも失望するな彼は何等の應用無くして一生を送り、我は僅かな事でも大なる應用を逞うするかも知れぬ、要は平々坦々たる心を以て學ぶに在るのみ。

(中學世界)